

F2-9

プレーパークにおける友人の形成と地域社会との連携に関する研究 A Study on Friendship Formation and Community Collaboration in Adventure Playground

○大石 愛斗¹, 植田 瑞昌², 田中 賢²
*Manato Oishi¹, Mizuyo Ueda², Yasushi Tanaka²

An observational study was conducted at a play park in Sumida Ward. The study aimed to clarify the relationship between the play park and the local community. The results showed that usage patterns at the play park fell into three categories: “weekdays,” “holidays,” and “event times,” with parent-child participation being the primary form in all cases. During events, interaction among children increased, but connections between parents remained limited. A key challenge moving forward is developing mechanisms to encourage interaction among local residents and parents.

1. 研究の背景と目的

近年、子どもの屋外での遊び場環境は住環境の都市化や安全志向の高まり¹⁾により大きく変化しており、自由に遊べる空間は減少している。その一方で、子どもの健やかな成長には、自由で多様な遊び体験が欠かせないとされている。こうした状況の中で、子どもが自ら遊びをつくり、地域の人々と関わることができる「プレーパーク」が注目されている。これはデンマークの造園家 C・Th・ソーレンセン氏がコペンハーゲンで始めた「がらくた遊び場」が起源で、日本では世田谷区の「子ども天国」から日本各地に広がった²⁾。

プレーパークは子どもの遊び場であると同時に、子どもたち同士の交流や信頼関係を育む場ともなっている。しかし、そこで生まれる「つながり」が地域にどのような影響を与えているかについては、十分に明らかにされていない。

本研究は、墨田区にある「わんぱく天国（プレーパーク）」を事例に、わんぱく天国で生まれる「つながり」と地域の関係性を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本研究では、プレーパークにおける「つながり」の実態を把握するため、観察調査を行った。

2. - (1) 調査対象のわんぱく天国概要

墨田区押上一丁目に位置し、墨田区が管理している約2700 m²規模の公園である。1987年に設立し、現在38年目である。

2. - (2) 観察調査概要

調査の概要を表1に示す。

表1 観察調査概要

調査方法概要	
調査対象地	墨田区わんぱく天国
調査期間 調査時間帯	2025年6~9月、2~3回/週、2時間/回 昼前・昼後・夕方（同施設の開園時間は9時から18時）
調査方法	調査員(1名)が全体を見渡せる場所に立ち、利用者の行動を観察調査し、記録紙(平面図)に、内容・移動について記入する。
調査項目	天候: 天気・気温・湿度・風向 利用者: 全体来場者数、エリア別来場状況(利用者数、性別・年齢層・遊びの種類、人気・不人気エリア)

表2 わんぱく天国・エリア説明

6エリア	エリアの特徴
エリア1 エントランスエリア	わんぱく天国内外を仕切る堀に沿って建つジャンボゲートがあり、上を網状ロープで遊ぶ。
エリア2 山エリア	小学生の活動が多く、集団遊びが盛ん。ただし滞在時間は短い。保護者同士の交流は少ない。
エリア3 休憩エリア	「見守りの場」として機能。保護者の滞在が長く、多世代が同じ空間を共有する。
エリア4 大広場エリア	小学生が多く利用し、プレーリーダーなどを中心に遊びがイベント的な遊びを展開。
エリア5 小広場エリア	未就学児と保護者の利用が集中し、交流が生まれやすい場。プレーリーダーに近いため、安心感が得られる。
エリア6 木工エリア	木工作業を目的とした小学生が多く集まる。

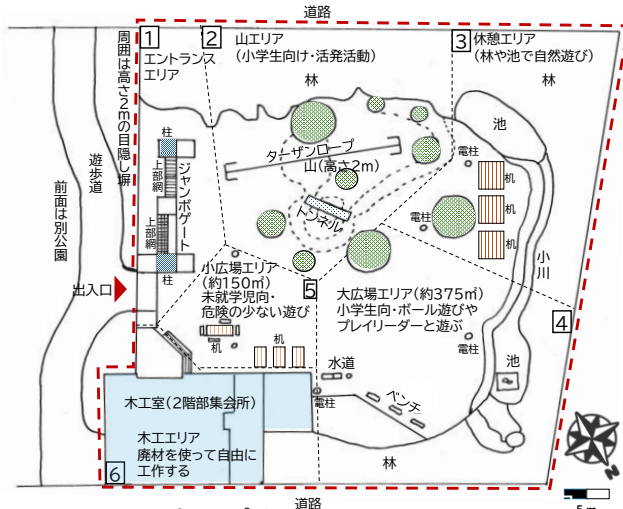


図1 わんぱく天国・配置図

3. 調査結果と考察

わんぱく天国での予備観察調査を2025年5月に実施し、エリアを6つに類型できた(図1)。

1: 日大理工・学部・まち 2: 日大理工・教員・まち

3. -(1) 6エリア分類と特徴

エリア毎の特徴を表2に示す。利用者の年齢に応じて遊ぶ場所と内容が大きく異なっており、混在しないことで身体機能の異なる児童の衝突などの事故を回避できる。

3. -(2) 曜日・時間帯別の利用者構成と交流の特性

特徴的な行動の様子を図2～図4に示す。

平日の昼間・夕方(図2)：平日の昼間や夕方は未就学児が中心で、自然遊びや小広場・エントランス周辺での活動が多い。これらのエリアでは身体的リスクが低く、プレーリーダーの見守りも得られるため、保護者にとって安心感がある。遊びは親子一対一の関わりが中心であり、保護者同士の交流は一部にとどまる。

土日の昼間・夕方(図3)：土日には未就学児と小学生が同程度に集まり、年齢に応じて活動エリアが分かれる。小学生は山や大広場で活発に遊び、未就学児は小広場やエントランスで安全に過ごす姿が見られる。多様な遊びが並行するものの、中心は親子単位であり、保護者同士の交流は限定的であった。

イベント時(図4)：毎週水曜のイベント時には地域の子どもが多く集まり、大広場がにぎわう。小学生を中心に活発な遊びが展開され、子ども同士の交流が比較的多く見られた。一方、保護者は見守り役に徹し、親同士の関わりや親と地域との積極的な関わりはほとんど確認されなかった。

本プレーパークの設計自体が「子どもが遊びを通して育つこと」を前提にしており、安全性確保のためにフェンスで囲まれていることも、地域住民の憩いの場としては機能しにくい要因となっている。これにより、地域との接点や保護者交流の機会が限定されていると考えられる。

4. まとめ

本研究では、プレーパークの利用形態を「平日の昼間・夕方」「土日の昼間・夕方」「イベント時」の3パターンに整理し、それぞれの特徴を明らかにした。いずれのパターンにおいても親子単位での関わりが中心であり、保護者間の交流や地域コミュニティ形成には十分につながっていなかった。

このことから、従来の「子ども中心」の形態を維持するだけでは、地域に開かれた場としての役割を十分に果たせないと考えられる。今後は、地域住民や保護者の交流を意図的に促す仕組みを導入し、子どもの遊びを保障しつつ地域に根ざした新しい形態のプレーパークを模索することが求められる。

5. 参考文献

[1] 国土交通省:都市公園における遊具の安全確保に関する指針(改訂第2版)、平成26年6月
 [2] 厚生労働省社会保障審議会児童部会:冒険遊び場の専門性について、平成30年1月、
https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000192608.pdf(最終閲覧2025年9月末)

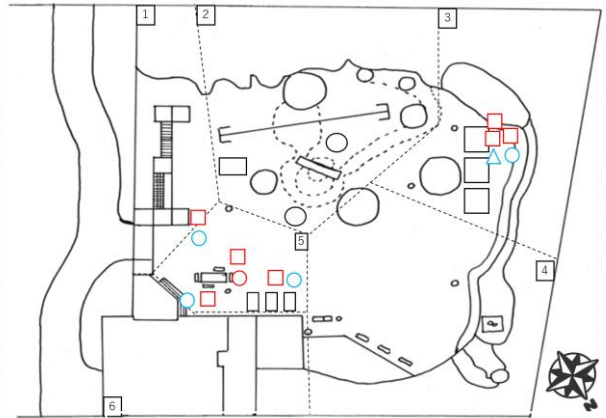


図2 平日の昼間・夕方

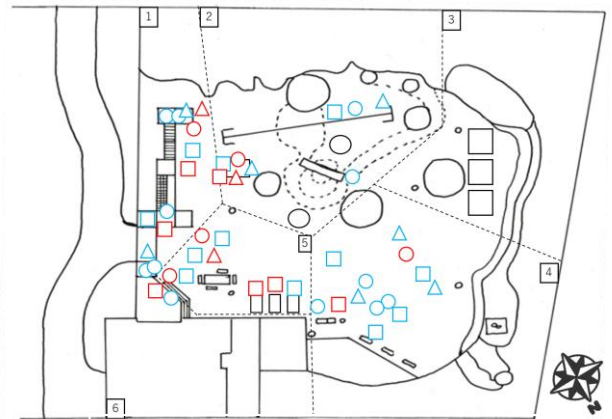


図3 土日の昼間・夕方

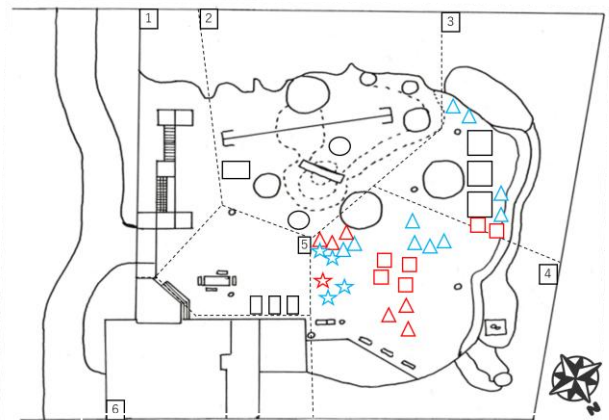


図4 イベント時

図2から4の凡例

○未就学児	□保護者
△小学校低学年	■地域の人
▲小学校高学年	☆プレーリーダー
◇中高生	★調査者
— 男性	
- 女性	